



写真1 『週報』

や日本軍の戦闘状況、内政の課題、新制度などについて記された約三〇頁の小冊子である。一冊五錢だった。

◆第二八一号（昭和十七年二月二十五日）
大東亜戦争完遂 翼賛選挙運動
前年、議員任期を一年延期したことを受け、四月三十日に衆議院の総選挙が行われる。総選挙を機会に大東亜戦争完遂の決意を新たにしよう。最も大事なことは戦争の大目的にそつて、

『週報』と『家の光』の寄贈にあたり

筆者 田中裕行

はじめに

四二年間勤めた神戸市役所を昨春、退職し、長年の懸案だった実家（三木市）の古い納屋の収納品の片付けを行った。薄暗い納屋の中には昔の農機具や、法事用の食器類にまじり書棚があり、私の祖父（庄太郎）が読んでいた本が並んでいた。その一部が今回、当館に寄贈させていただいた『週報』一一八冊（昭和十七年一月二十八日号～二十年二月二十一日号、写真1）と『家の光』七九冊（昭和十年十一月号～二十年一月号）である。前者は戦時中、内閣情報局が毎週発行し、その時々の国際情勢

後者は産業組合中央会（現・農業協同組合）が発行する約二三〇頁の月刊誌で、「一家一冊万能雑誌」と呼ばれ、生活の修養面、時事解説、小説、健康法、子育てなど内容は多岐にわたる総合雑誌である。普通版と都市版があり寄贈品は都市版である。一冊二〇銭だった。

戦前から戦中の史料として、まとまりがある出版物なのでどこかに寄贈し役立てていただければと考えていたところ、以前、私が仕事の関係でお世話になつた大国正美館長から当館で受けてもよいとのお話をいただき大変、感謝をしている。また、この史料館だよりで本史料を紹介する機会を与えていただき二重に感謝をしている。

一、『週報』の紹介

週報の記事の中で、特に国民生活に関わりの深いと思われる「常会の貢」と「通風塔」を取り出してその内容を紹介したい。

1 「常会の貢」

週一回、発行される週報の紙上で、月一回定期的に掲載されていたのが「常会の貢」である。常会は、集落単位で全所帯参加のもと必ず毎月十日までに開くことが求められていた。政府として、その時々、全国民に周知・徹底したい方針や取組内容が「常会の貢」に書かれている。

真に聖業をする人材を議会に動員することが重要である。

戦果に応えて感謝貯蓄

開戦した昭和十六年十二月八日に八八億円だった郵便貯金が翌年二月十一日には九三億円に達した。ただ、その九割以上が通常預金で払い戻しの容易なものである。今回の運動では戦時貯蓄にふさわしい定額貯金と積立貯金を、一戸で必ず一口は預けていただきたい。

ヒマを栽培して奉公を

ヒマの種子から採れるひまし油は発動機を動かし、プロペラを回し戦車を走らせるのに必要な高級潤滑油である。その必要量はガソリン消費量の一五分の一と言われている。これまで輸入に依存してきたが、今後は極めて困難になつてくる。幸い、全国各地で栽培が容易で、沢山の実を採ることができるので、庭や公園、空地などで積極的に栽培されたい。種子は市町村から部落会、隣保組を通じて配布する。

◆第三一一号（昭和十七年九月二十七日）

軍人援護を徹底的に強化しよう

十月三日から八日まで軍人援護強化運動を実施する。①常会で「銃後奉公の誓い」を朗唱しよう。②戦没軍人、出征軍人の家庭を訪問し慰問の挨拶を。③出征軍人に慰問袋を送ろう。なるべく食料品は避け新聞、雑誌、読み物、写真などが好ましい。

木炭の増産と消費節約を

極寒時には食料にも匹敵する大切な木炭を事欠くことのないよう、また凍傷と闘いながら皇国の守りについている将兵を思い、ひとかけらの木炭も粗末にしないようにしよう。

鉄や銅を供出しよう

大東亜戦争を遂行するためには大量の鉄や銅が必要なことは言うまでもない。南方には素晴らしい資源があるが、それが国内に入つてくるまでの間、国内の回収でまかなっていく必要がある。町内会、隣組などを通じて、金属回収統制会社に供出を。値段は昨年と同様。軍へ献納される場合も、同会社で受ける。

◆第三四九号（昭和十八年六月二十三日）

決戦下の服装を徹底しよう

衣類は新調せず、すべてあり合わせで済ますこと。やむをえず新調する場合は国民服とし、背広の仕立てはやめること。不用の衣類は隣保で融通交換し、修繕や作り替えをすること。

申告を正確にすること

配給の申告に人数を増やしたり、二重に申告するのは最も悪いことである。町内会、隣組では間違った申告があれば、直ちに直すこと。

食料の非常増産に邁進しよう

①不耕作田があれば部落の共同作業で、水稻耕作をやり遂げること。②河川敷、公園、緑地、工場予定地など、あらゆる空地を活用し、大豆、蕎麦、アワなどを作付けすること。③果樹園、桑畠などに大豆や蕎麦の間作を行うこと。

2 「通風塔」

週報の最終ページに、毎号ではないが「通風塔」という欄がある。これは今でいう「読者の声」で、その時々の世間の風潮に対する意見が書かれている。官製の発行物であるので軟派な風潮に対する批判意見が多いが、戦時下であつても一定の自由

が許容され、規制が緩かった面も感じられる内容となつていて。当時の市民生活の雰囲気を知る参考に紹介したい。

「真心こめた慰問袋を」（昭和十七年二月二十五日）

兵隊さんが一番嬉しいのは、銃後の我々が送る慰問袋だ。食べ物や慰問文を送ればその役割は果たせると思う人もいるだろうが、真の慰問袋は自分の手で作り真心を込めたものでなくてはならない。百貨店に行けば出来上がった慰問袋を売っている。手間が省けるというので買う。たとえ品物は買うとしても作つてある慰問袋を買うのは謹んでほしい。作つて送つてこそ戦地の兵隊さんは励まされるというものだ。

（東京都、男性）

「経済事犯に体刑を」（昭和十七年四月八日）

統制経済事犯には厳罰でのぞむと当局は言明したが、闇値や計量不足はあとを絶たない。これらの悪徳商人には罰金刑くらいで改悛しない。罰金刑は覚悟の上の犯罪と思われる。罰金刑に体刑（拘束刑）を併科し、営業停止等の行政処分も行うべきである。

（神奈川県、男性）

「日本字の横書き」（昭和十七年五月十二日）

新聞紙上で拝見すると、日本字を横書きする場合は、左より書くことに決まつたようだが、週報はいまだ右から書いている。率先垂範すべき週報はどうして左書きにしないのか。

「米の配給量」（昭和十七年七月八日）

米の配給量は府県によつて異なつてゐるようだ。例えば三重県では成人一人一日三合に対し、和歌山県では二合である。その他の県でも、二合五勺から三合まで配給されてゐるようだ。乏しきを憂えず、等しからず憂うだ。一億一心、団結するため

に全国一律の配給をお願いしたい。

（和歌山県、男性）

「英字追放論」（昭和十八年一月六日）

町に家に、我々の周りには、ローマ字、英字が溢れている。特に看板や包装紙に甚だしい。大東亜共栄圏の人達が日本に来て、これを見た時、なんと感じるだろうか。英米の文化に支配された日本を見て、指導国日本に対する信頼が薄れるのではないか。町から家から、ローマ字、英字を追放し、本来の日本文字を使用しよう。

「休日を減少せよ」（昭和十八年一月六日）

我々、勤め人はあまりにも多くの休日を取りすぎのように思う。戦地の将兵に申し分けがない。決戦の今年の休日を次のように提案したい。①日曜休日を廃止し、十日、二十日、月末日を休日とし、各五の日を半日勤務とする。②四大節をのぞく日はすべて勤務日とする。

（愛知県、男性）

「これが戦う国の首都か」（昭和十八年一月十三日）

公務で久しぶりに上京したが、グラグラしている人間の多いことに驚きいた。軽薄浮薄な女子の姿は何事かと思う。俺に連れられて入つた喫茶店では、同年代の者が、銃を手に戦つてゐるというのに、頭をトンボのようにテカテカさせて、平然とコーヒーを飲んでいる様には腹がたつた。決戦下の首都東京がこんなことでは困つたものある。七〇〇万都民の猛省を望む。

（静岡県、男性）

「高級飲食店の絶滅」（昭和十八年一月二十日）

この戦時下に、高級飲食店、料理店が営業しているが、このような店を利用しているのは、ほんのわずかな人であろうと思

う。早い話、私ども、女、子どもには縁のない所だ。このような店は転業していただい、それだけの物資を一般の飲食店や家庭に回していただいたらどんなに助かるかもしねれない。

(東京都、女性)

「米英の呼称」(昭和十八年三月十日)

「米窮迫す」とある同じ紙面に、「米を大切に」とあり、まことに煩わしい限りである。昔は知らず、彼らを敵とし戦っている今日。彼らを遇するに美称をもつてする必要がどこにある。些事ではあるが、いまだ敵を憎むのに徹していない表れでないか。

「我が方の損害」(昭和十八年三月二十四日)

開戦以来、皇軍戦士の勇勝に、ただただ感謝している。ところで大本営発表の戦果についてであるが、損害の扱いが戦果に比べて活字が小さいのが気になる。戦果と同様に扱い「この犠牲を忘れるな、この恨みを米英にたたきつける」の弁をもつて、敵懾心の徹底を図るべきである。

(高知県、男性)

「酒を六時からに」(昭和十八年四月二十一日)

酒の販売は五時からとなつているが、時間前に行つて並ばないと具合よく飲めない。決戦下の今日、まだ日も暮れぬ内から、大の大人がずらりと並んでいる様は褒めたものでない。そこで酒の販売は六時からにしたらどうであろう。そうすれば、勤め人は時間まで十分働いて飲めるし、明るい内から行列を作ることもない。

(大阪府、男性)

一二、『家の光』の紹介

『家の光』は実際に多様なテーマを取り上げているが、これらの

中で、比較的、現代人の関心に通じる内容の多い昭和十二年三月号を、パラパラとページをめくり、読み飛ばしする感じで紹介する。

【表紙】

毎号、若い婦人の着色絵が表紙を飾る。一見、婦人雑誌のようだ(写真2)。

「大陸へ移動する花嫁」

満州の開拓村に嫁ぐため、夫になる人の写真を胸に出港する花嫁たち。「望みに燃える花嫁の元気な笑顔」とあるがさぞや不安でいっぱいであつたと思われる(写真3)。

【皇室の御采え】

現代の雑誌にもあるような皇室アルバム。右上が現上皇陛下、



写真3 大陸へ移動する花嫁



写真2 表紙

左上は昭和天皇の長子、輝宮成子殿下（写真4）。

「名士とその母」

戦前は皇后の誕生日（三月六日）が母の日であった。それを記念して、西條八十、東海林太郎などが母について語っている。西條は母を詩人と評している（写真5）。



写真5 名士とその母



写真4 皇室の御栄え

描いている（写真6）。

「漫画オリンピック」

一コマ漫画、四コマ漫画。公募した案をベースに絵を作家が描いている（写真6）。

「この母ぞ日本の宝」

厳しい母の教えに習い修養した歴史上の人物を紹介。賴山陽、渡辺華山など（写真8）。

「各方面の試験官の座談会」

当時、話題であつたと思われる自家用運転免許、産婆試験、飛行操縦試験、放送局試験、などについて、試験官が試験方法や裏話を興味深く紹介（写真9）。



写真7 満州移民村訪問記



写真6 漫画オリンピック

映画物語「女人哀愁」

その年に上映された映画をもとにした短編小説。好きだった従弟の男性を諦めて、親のすすめで結婚した女性が小姑のいじめに耐えられず、嫁家を出て自活する話である（写真10）。

おわりに

祖父は私が生まれる前に亡くなつたので、これらの中がある理由を直接には聞いていないが、新聞を読むのを日課として、近所

の人々が集まっているところに行き、読み聞かせるのが好きで、活字には抵抗がなかつたようだ。また、農業の傍ら化粧品などの小間物を自転車に載せ、近郊の農家に日帰りで売り

歩く行商を営んでおり、訪問先での話題づくりに読んでいたの

でないかと思う。

戦後生まれの私にとって、戦前と言えば、終戦の昭和二十年を境に、隔絶された遠い昔というイメージが強かつたが、市民生活の上では、戦前からの連続した日常の上に今日があることに、これらの本を読んで気づかされた。

戦時体制と平和な戦後の違いはあるが、今日と似た感覚で生活が営まれていたことがよくわかる本である。自宅の納屋にあり、祖父が読んでいたということもあり、自分の身近に戦前を感じる機会となつた。

神戸深江生活文化史料館は、深江地区および周辺の阪神間の地域史の研究と情報発信を目的にされており、少し異例かと思うが、戦前の国民生活の一端を知る史料としてお役立ていただければ幸いである。



写真9 各方面の試験官の座談会



写真10 女人哀愁



写真8 この母ぞ日本の宝